

近代文化研究所所員勉強会（平成 18 年度）要旨

第 1 回 平成 18 年 6 月 30 日

食文化の背景にある人間の知恵

本学特任教授 木 村 修 一

広辞苑によれば、文化とは「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果」となっており、当然のことながら、食生活の場合も自然との関わりで、地域に密着した食の営みの上に成立するものであるといえよう。その例としてウイスキーの世界的ブランドであるスコッチウイスキーの出現の歴史と、伝統的な食パターンを持ち続けているメキシコ・インディオの食生活などについて述べた。17 世紀のはじめ、イングランドに征服されたスコットランドは地域の衣装文化であるタータンチェックを織ることも着ることも禁止され、ウイスキーに重税を課すという大きな打撃を受けた。彼らはひそかに山奥に引き籠もり、密造をすることで対抗せざるを得なかった。ウイスキー作りはこの地域の気候と地勢を活かす地場産業であり、守らなければならないという強い意志が感じられる。密造時代に育んだ技術は子供たちに引き継がれ、80 年を経て重税が解除された以後の世界に羽ばたくスコッチウイスキーの発展の基礎を築いたのである。自分たちのまわりの自然環境を最大限に活かし、伝統的な食文化を頑固に守った成果といえよう。もう一つの例であるメキシコインディオの食生活は 5000 年の歴史をもつ如何にも古めかしいものである。それは一見して貧しいものであり、主食のトウモロコシから作るトルティーアのタンパク質の栄養価は非常に低く、これだけでは健康に生きていけない。しかしこれと必ず一緒に食べるフリフォーレス（豆）のタンパク質はトウモロコシのタンパク質の欠点を埋めるアミノ酸組成をもっており、また、インディオたちの飲んでいるリュウゼツランの汁から作るブルケ（どぶろく）にはビタミン B 群が豊富に含まれているなど、現代の栄養学から見て驚くばかりのよい組み合わせのパターンをもっている。この食パターンを作り上げた古代の人たちの知恵を伺い知ることが出来る。このような組み合わせの成立には人間の生理的要求が反映されており、長いあいだの経験の中から身体によいものを試行錯誤の末に選んできた結果と考えられるのである。つまり食文化成立の背景には地勢や気候といった環境条件と、人間の生理的要求が潜んでいるのである。

第 2 回 平成 18 年 11 月 22 日

猫の家 ―その前・その後

本学学長（当時）平 井 聖

建築の歴史、特に住宅の歴史には、その根拠となる実例や文献が、時代が古いほど乏しく、ことに住宅平面をそこの生活と対応させて考察を進めようとする、生活の記録はほとんどなく、明治以降でも不可能に近いといわざるを得ません。そのような中で、夏目漱石が書いた『吾輩は猫である』は、漱石自身の生活体験が基盤にあり、その舞台となった建物が残っているという恵まれた資料といえることができるでしょう。

しかし、このような資料は歴史を編むための史料としてみると、偶然に残されたものですから、住宅史の流れの中での位置づけなしに使うことはできません。そこで、この『吾輩は猫である』を、どのように位置づけたらいいか考えてみることにしました。

この住宅の平面の中で特徴的なのは、玄関から次の間そして座敷へと連なる一列の部屋の並びです。そして、一番奥の座敷には奥の面に玄関の方を向いた床の間があります。この部屋列は、江戸時代の武家屋敷を特徴付けていた部屋の配置で、玄関から入ってきた訪問者に、奥から出てきた主人が対面するための形式です。訪問者は、主人より身分が低いのが常でした。『吾輩は猫である』でも、床の間の前に座ったのは主人ですし、尋ねてきた人々は下座に座っていて、部屋の配置も使い方も封建時代そのままです。

一方、座敷の北に茶の間があり、この部屋に置かれた食卓を囲んで家族が食事をしていますし、この部屋が主婦の居場所になっています。このような使い方は、封建時代にはまったく考えられなかった、家族を意識するようになった近代の使い方です。さらに、座敷の裏にある部屋が夫婦の寝室、その北の部屋が子供たちの寝室という分離就寝の形態も、封建時代にはなく、近代的です。

茶の間はその後さらに変化して、南側の日当たりのいい位置を占めるようになり、家族が集う部屋として住宅の中心となりますから、この時点では近代化はまだ達成されたとはいえません。玄関から座敷への部屋